

第十一章 POINTING THE WAY 道案内

サンティが死んだ一九七四年、雑誌や新聞はマルコスのことを数億ドルを手に入れたアジアの大金持ちの大統領と呼んでいた。不思議なことに富の源は説明されていない。聞かれると、ニヤリとし、実は山下将軍の金塊をみつけたんだと話すのだが、人々は冗談だと思っていた。しかしマルコスは地下金庫に積み重ねられている金塊を多くの人に自慢げに見せていた。その中には奇妙な刻印の物もある。もうこれは冗談ではあり得ない。CIA冷戦兵士の初代メンバーの一人で、サンティの回収のすべてを知るジョン・シングローブは、マルコスの百二十億ドルの財産は実際のところ山下の財室によるものだと保証した。彼の財産がその様に膨らんだのは、竹田皇子の従者、フィリピン人のベン・バルモアの出現と、戦時中に作られたゴールデン・リリーの地下金庫とその明細書によるものだ。マルコスの探査部隊がテレサー2や沈んだナチ船、他の地下金庫からの財宝を回収できたのはベンのおかげだった。私達が最後にベンを確認できたのは一九四五年六月で、八番坑道というバンバングの地下坑で一七五名の主任技師達がお別れパーティーを開催中に生き埋めにされた時である。竹田皇子と山下将軍は深夜に洞穴を去った。強力な爆弾がしかけられていたのだ。皇子はベンを洞穴の中に残すことを拒否した。山下は呆れて怒っていたが、彼を地表へ連れ出し安全を守った。数分後、大きな爆発が地表を揺るがした。

「キムスは戦争が終われば僕を家に帰すとパパに約束したんだ。」とベンは我々に語った。キムスは、山下が僕を中に残そうとしたのを許さなかった。僕達が叔父の家まで行った時、キムスはその夜、潜水艦で日本に帰ると言っていた。彼は僕に軍刀と上着をくれた。彼は僕の性格は替えちゃいけないよと言ったんだ。いつでも親の言うことは聞いて、そして彼に忠実だったことに感謝してた。それから彼は地図の入った小型のカバンを私に渡し、

地中に埋めておけ、私はいつかここへ戻ってくると言ったんだ。」皇子は夜の闇に消えた。言われた通り彼は頑丈な木箱へカバンを入れ、叔父リノの家の裏に埋めた。三カ月後、山下は降服した。カバンを掘り出すまでに何年も経っていた。それまで、デュラオやバンバングの周りは米兵でいっぱいだった。ベンは彼等に雇われ、野営場の調理場仕事をもらっていた。錆びた刀と勲章は、GIに売り払ってしまった。ある時、インディア部落の森の中にたくさん隠してある日本軍のトラックを水牛の荷車で引きずり出し、デュラオまで持つてゆき、その中の十五台をGIに五ドルで売った。当時五セントもあれば、十分に食事がとれたのだ。

アメリカ兵が去り、カガヤン溪谷に再び平和が訪れ、ベンは竹田宮の刀と軍服を取り出してきた。白い上着は彼に良く似合った。左胸にはまだ菊の刺繍があり、父が人々から反逆者と呼ばれるぞと警告を受けるまでずっとその上着を着続けていた。しかし、その後は家の中だけで着ていた。日本刀は収穫の時に稲の刈り取りに使い、刃先がなくなるまで使った。彼はその刀が明治天皇から竹田皇子が拝領したものだとは知る由もなかった。二十年以上過ぎてても竹田は戻っては来なかった。竹田はベンに対する将来への保障として金塊でいっぱい大きな鉄製のトランクを二つ埋めていった。それはピンキアン橋の袂、大きなマンゴーの木の下に立坑を掘り、荷車五台で運び五十人の兵士が引きずって埋めたものだった。竹田はベンに言った。「戦争が終わったらこの箱を掘り出すのだよ。そして大きな農場を買ってデュラオでも飛び切りの美女と結婚し、たくさん子供を生ませなさい。」と。しかし、アメリカ兵が去るまでは怖くて近づくことができなかった。一九四九年、叔父リノの知り合いでバニッツというマニラの弁護士がバンバングへやってきた。彼は、戦時中サンフェルナンドで日本人と一緒にいたフィリピン人を探していると言った。叔父のベンは、それなら私の甥っ

子に違いないと答えた。ベンはいつも宝物を掘り出したがる頭がおかしい子だと彼は言った。「行くよパパ、ここを掘ろうよ、ここだよ。」なんてね、とリノは物まねをしてみせた。「ベンは財宝を埋めた所を知っているけど、彼の父は、危険な罠があるから触れてはならないと言っていたよ。」

野良仕事から帰ったベンは、宝物のことは何も知らないとベニッツに答えた。弁護士のおばにいたりリノはベンに竹田宮が残っていた二つのトランクを思い出せと言った。それを聞いた弁護士は興奮して、すぐに皆でピンキアン橋へ行きトランクを回収しようと言出した。

ベンは秘密を守るけれど、弁護士は赤の他人だ。

次の早朝、彼らはピンキアン橋の袂の部落まで農場学習労働者と共に車で出かけた。部落の地区長である長老が出迎えた。ベニッツは市長の出迎えに気づき驚いたふりをして、「これはこれは市長さん、私達はとても大切な仕事で参りました。」と言うと、市長は「まあ、あがつてちよ。」と答えた。

ベンは他の者と冷たいポテトの朝食をとるため下に残された。二人の策士がもどり、市長がベンに言った。「あんたは知ってるか？あんたら市民は金を持つということはできないのだわ。半分づつ分けることはだめだと言ってるんだ。うちの政府は許さんでねえ。私らにそれを差し出すなら、謝礼として金の棒一本ぐらいならやってもいいが、どうだ。」ベンが弁護士のベニッツを見ると、彼は重々しくうなづいた。「いいさ。」ベンは言った。「行きましょう。何もくれなくていいですよ。私は箱の中身が見たいだけですから。」

彼は川のそばへ連れて行き、マンゴーの木ではなくアカシアの木へ連れていった。そして皆が一日中掘っているのを眺めて、ほくそ笑んでいた。

やがて陽が落ち、彼らは波も発見できなかった。

ベンは言った。「多分、日本軍が掘り出して他のどこかへ持っていったんだ

よ。」と。ベニッツは、木を見上げて言った。「お前はマンゴーの木下と言ったが、これはアカシアじゃないか。」

ベンは、「その木がマンゴーだと思っていったんだ。」

デュラオへ戻る道中でベンは弁護士に語った。「あなたは私を騙せると思っただろうが、あなたの事を早くわかったので私は助かりましたよ。」

帰宅して、ベンはリノおじさんに、彼ら二人がしようとした事を報告した。

ベニッツは言い訳にあげくれた。そうしている彼らを残し、ベンは外へ出て大笑いをした。

ピンキアン市長に捕らえられたり拷問されたりすることを恐れ、ベンは何年もそこへは行かなかった。その河は新人民軍の勢力圏内だった。ベンは共産軍にさらわれたくはなかったのだ。一九九九年、ベンはついに友人とそこへやってきた。大きな台風のせいでピンキアン橋とトランクが埋まっていた堤防全体が流されていた。もちろんマンゴーの木もなかった。トランク一個の重さは一トンもあり百万ドルの価値がある。彼らは泥で埋もれたピンキアン川の下流にいた。農園にするにはびったりだろう。

キムスは可愛い誰かと結婚しろと言った。ベンは結婚し子供もあつた。最初の結婚を経て再婚し、二人の娘をもつた。彼はとても優しかった。しかし戦後二十年以上過ぎても貧しい農民のままだった。彼はデュラオに小さな家を持っていた。ちょうど日本兵数百名が隠匿した場所だ。しかし彼はそれを発見する幸運には恵まれていなかった。彼が何かしようとする、いつも騙されるか盗まれるかだった。ある静かな夕刻、彼は円錐形の丘が点在する山間の渓谷を眺めながら座っていた。キムスがくれた地図は家の裏に埋めたままだった。彼は何度も鞆を掘り出した。判読すること自体は簡単だった。しかし、意味がわからない。しかたなく鞆に地図をもどし、再び埋めた。ただし磁石（コンパス）と望遠鏡は出したままにした。宝探

しの連中はその様な地図が存在することを知っていた。それらは三種類あった。白表紙には一般的な各施設の位置が示されている。ベンが持っていたのは赤表紙で、暗号を解読すれば、回収に必要なすべての情報がわかる。

技師が書いた青表紙には、技術的な言葉の説明付で詳細な情報を解説している。いくつかの白表紙は教会で見つかり出回っていた。しかし地下金庫や深さを特定する必要な組み合わせを与えていなかった。一九五三年、七名の若い日本人がベンのところへやってきて、彼の持つ地図を買いと申し出た。彼らは戦争の体験があるには若すぎる。しかし、何故か地図がベンの所に残っていることと、デュラオにベンが住んでいることを知っていた。

多分彼らは竹田の息子の友人か、竹田皇子の息子だったのだろう。彼らは自分が誰なのかを説明しなかった。ベンは財宝の地図について何も知らないと否定し、どうして会いに来たのかを尋ねた。彼らは笑いながら、「私達はあなたのことを知っていますから。」と言い去って行き再び現れることはなかった。戦争が終わり、宝探しが村の主産業になった。日本人が金塊を隠した場所を知っているフィリピン人はポインターをよばれた。各村にポインター、金中毒者、反対者、地域の長老や伝道師がいて、秘密の地図や目撃した記憶をもっていた。大きな収入になりそうだと見ると、秘密の場所へ案内してくれ、掘る所をみせてくれる。彼らは絶妙なタイミングでお客があきらめるころに別の力を探するために雲隠れするのだ。ベンにはポインターになる気はなかった。彼はキムスとの誓いを守った。ただ、父親にはバンバング付近の施設について話をした。ベンが見てきた記憶は消えていない。どうやってキムスと各施設へ行ったのか。そしてどんな風にキムスが青表紙の図面を持ち、歩き回るところを眺めていたのか、地下金庫を閉じる命令を出す前に最終的な一覧表を作ったことも覚えていた。くだらない財宝探しの連中がベンに詳しく話すように圧力をかけてきたが、彼は

口をつぐんでいた。彼はただの目撃者ではない。生き残った戦時捕虜、逃げた台湾労働者、ジョーン・バリンジャーの様に日本人が金を隠匿するところを見ていたアメリカ人やフィリピン人もいくらかはいるのだ。森林地帯の牧草所有者の家族が回収に成功したという噂だった。彼らはバンバングの要人になり、町に三階建てのビルを建て大きな三つの衛星アンテナからTVを受信しTV会社を運営した。ベンは皇室の地下金庫、一七五箇所すべてを贈呈できる唯一の男だ。そして彼は貧乏のままだ。

ある時彼は小さな高さ四インチの金の仏像を掘り出した。小さな農場を買う事ができるのに、値打ちが分からないためにラジオと交換してしまった。彼が二十二歳になった時だった。彼はつましくよい性格で妻と子供にやさしく、いつも笑みを絶やさなかった。一九六〇年代半ばになりマルコスが国内外で公に戦争状態が和らいだ日本人と財宝の回収に乗り出し、大勢の日本人が財宝を求めてフィリピンに戻り始めた。小さな集団が毎年カガヤン渓谷にやってきた。あるチームはバンバングの共同墓地周りを調査していた。そこは、キムス配下の労働者達が深い穴と七七七番地区と名付けられたとても大きな円形の地下貯蔵庫へ降りていくトンネルを掘っていたのをベンが見ていた所だ。そこは八番トンネルと九番などを含む複合施設の一部だ。ベンはその人達をひとりも知らなかった。そしてある日彼らはいなくなった。村人は夜のうちに切り取られた木を共同墓地の傍でみつけた。そして三つのトランクの蓋は開けられていた。彼らはそこにいくつかの金の延べ棒が隠されていたのをはつきりと見た。金の延べ棒の周りに木が生えていたのであり、木の中に金の延べ棒があったとは思わなかった。

一九六八年末、マルコスは日本へ使節を送り、もっとたくさんの回収をすすめるために共同開発を求めた。その使節には情報長官フロレンティノ・

ピラクルシス中佐、フィリピン軍統制官、准将のオノファ・ラモスと他に三人の将校がいた。その使節は、マルコスが発掘した一部分を日本に割り当てる見返りにゴールデン・リリーの財宝地図一式を求めた。

もし日本政府が協力しないなら、日本企業を全ての島から追い出してやる」と警告した。マルコス大統領は就任して最初の二年間、東声会の長、児玉と町井久之に率いられた日韓ギャングによる海底発掘を公認していた。他のパートナーに児玉の巣鴨仲間、億万長者の親分笹川良一がいる。彼は競艇を舞台にした賭けスポーツ界の有名人の一人で資金洗浄には都合がよかった。彼の本当の富はスカルノ大統領やマルコス大統領と共同してインドネシアやフィリピンの戦時略奪品回収を分け合って作った秘密資金からきていた。「私とマルコスとはとても親しいよ。」と笹川が記者達に言った。

「大統領になるずっと前からね・・・。」笹川は、たまたまゴールデン・リリーの施設を含めた財宝の中でマニラ湾に沈んでいる那智丸の場所を教え、引き換えにフィリピンで死んだ日本兵の共同墓地と慰霊碑の建設を許された。「私は個人として、フィリピンに墓地を提供してもらうために十分な最大級の文化会館を寄付してやったよ。正確に言ううと四万袋分だけ。(一袋いくらかは不明)」と自慢した。

ピラクルシス・チームが東京へやって来た時、児玉と笹川はゴールデン・リリーのリーダーだった秩父宮は一九五〇年代初期に結核で死んだと彼らに伝えた。そして、ピラクルシス達のために、秩父宮と一緒に活動していた別の皇族と秘密会談ができるように手配した。ピラクルシス一族の話では、その人は「裕仁の従兄弟で最高位にいる将校」ということだ。日本情報部の最高位に位置する陰の人物はラモスとピラクルシスに語った。日本はフィリピンで一千億ドル以上の財宝を隠匿してきた。そしてそのすべてを回収するには百年以上かかるだろうと言ったのだ。この会談の記録には

ピラクルシスによって市原公爵とだけ記されている。(裏では音声的にスペイン語でロード・イチハラと綴られている。)後にマルコスが権力を失い大統領安全命令の多くの文書で東京の市原公爵との秘密の接触に言及している。その文章は、市原公爵が、一九四二年〜四五年の間、ルソン島での隠匿作戦において秩父宮グループの鍵を握る一人であり、ゴールデン・リリーの生き字引であることをはっきりと示していた。彼は戦争中に児玉や秩父宮と働いていた高級情報将校のようにみえる。しかし、市原公爵を特定する努力は失敗に終わった。名前が一般的であり、いろんな綴りで書けてしまうからだ。戦後SCAPは貴族の称号を捨てさせた。だから一九六八年にその様な称号の使用は時代錯誤であった。彼は皇子ではなかったかもしれないが、伯爵か男爵だったはずだ。市原公爵というのはフィリピン人に彼が本当は誰なのかを隠すための偽名だろう。或いは戦時中の行いが評価され戦後になって裕仁からこっそりと称号をもらい公爵になることができたのかもしれない。私達は市原公爵が竹田宮の偽名だという可能性を考えてみた。しかし、二人は同一人物ではないと結論をだした。市原公爵がマルコスと共謀しようという意志は竹田皇子の個人的な正義感とは一致しない。キムスはベン・バルモアをマルコスから隠そうとしたが、市原公爵はベンへ彼を引き合わせた。ある日本情報筋は、シンガポールやマニラでの中国人虐殺や連合国パイロットの肝臓を食べたと罵られた悪名高い辻正信大佐に違いないと語った。華人殺害の後、彼は帝国監察長官の肩書きでマニラへ紛争調停役として送られた。形式的にあてはめるなら、辻はパターン死の行軍に責任をとるべき首謀者であり、穏やかな本間大将を出し抜き、行軍中の連合軍捕虜を殺すよう陸軍将校をけしかけたのだ。

彼は帝国海軍の支配下では、海軍の肩書きである大佐として扱われた。そして陸軍支配下では、軍服を変えて、やはり陸軍大佐だった。二年間は飛

行機で東京との行き来をして、ガダルカナルや他の戦闘に出現していたものの、一九四三〜四年の殆どをルソンで児玉とともにマニラ郊外のゴードン・リリー財宝貯蔵庫の監視をしていたと言われる。一九四四年後半、辻はビルマとタイへ移動し一九四五年八月の日本降伏時は捕虜にならないようにバンコクにいた。辻かどうかは別にして、市原公爵は一九四二年の半ばに海軍の軍服を着てマニラに着いたのだった。

日本船はマニラ埠頭で略奪品を降ろし、トラックを連ねてボナファシオ要塞へ向かった。サンティアゴ要塞と同じくボナファシオもスパイヤ作業員の疑いがある捕虜でいっぱいだった。ボナファシオを訪問中のことだ。市原は、国旗掲揚台に後ろ手でしばられ、日本語で汚くわめいている囚人の前を通った。驚いたことに囚人は流暢な日本語で答えた。市原はどうして日本語を喋るようになったのかを聞いた。囚人は母がフィリピン人で父親はマニラの大使館に所属していた日本人将校だと答えた。

「お前の名前は？」と市原が尋ねると「レオポルト・ギガと言います。」と答え、友人はポールと呼んでいると付け加えた。「『ギガ』は日本名だな。」と海軍大佐は言った。実際のところギガ少佐は一九二八年に満州の軍閥張作霖の暗殺を手伝ったことで有名だった。これはギガの父がもらったのだ。ギガ少佐は東アジア全域で日本情報将校として活動していた。一九二〇年代前半マニラに駐留しそこでフィリピン人と結婚し息子をもった。少年は成長し日本語、英語タガログ語を話した。しかし彼の父は上海やムクデン（Mukden）の任地に赴き彼は取り残された。一九三八年、ギガ少佐自体は暗殺された張作霖の息子が送り込んだ刺客により殺された。市原は囚人の紐を解かせ自分の管理下に置いた。それ以来ギガは通訳兼情報係として雇われることになった。彼の忠誠心と冷酷さを試すために頭巾をかぶせ、ボナファシオの囚人全員と面会させた。ギガと市原がテーブル

にすわり、その前を全員歩かせた。頭巾を被ったままのギガは、アメリカのために秘かに活動している男をみつけると頷いた。そしてそれらの男達は即刻処刑された。タガログ語で裏切り者は「マカピリ」という。しかし頭巾がギガの正体を隠した。

それ以来ポール・ギガはルソンでの市原の子分になった。マニラ市にあるサンティアゴ要塞などの四つの財宝貯蔵庫や罾を技術者達と設計したのは市原だった。ポールはカーバイト市から電気工事技師を手配し、罾の配線作りを手伝った。

市原がマニラから陸軍指揮下の田園地帯へ活動範囲を移した時、彼は陸軍大佐の制服に着替え、ギガには日本の第十六技術師団少尉の階級を用意させた。ギガは地下抗技術を日本で半年間学んだと言った。しかし、ギガは場所に合わせて色を変えるカメレオンの如く絶えず話を変えることがわかった。

二十五年が過ぎ、市原は東京でピラクルシス大佐に、マルコスヘゴルドン・リリーの財宝地図の全てを渡したいのならポール・ギガを探すことだと言った。その後、ピラクルシスは竹田皇子の従者をしていたベン・バールモアを探し出すことができた。皇子の説明では、日本へもどる潜水艦が沈められるという想定される中で、すべての地図はベンの所に残してきたということだ。

市原はピラクルシスに、ギガはフィリピンでコルゲート歯磨に雇われていると語った。だから市原は戦争以降ギガと接触していたことは間違いない。市原はギガがコルゲートの収入を補うため、日本人の金掘りグループの通訳やポインター、黒幕として仕事をしていると言った。ギガは日本人が余分な不信感を持たない様に、車、堀削機、発電機、ドリルなどを借りていた。

ピラクルシスはどの様にしてギガが本物のベン・バルモアを見つけたことを知ったのかを聞いた。市原は言った。彼らはベンに直接竹田宮と電話で話しをさせ、その会話を全部聞いたという。もし彼が本当にベン・バルモアならばすぐにわかることだ。東京から戻るや否や、ピラクルシスは急いで諜報員をコルゲートへ送りギガを探し、大統領令で彼を引っ張った。怯えたギガは問われるままになった。

ベンを探し出すことは難しいことではないとギガは言った。戦時中に竹田宮と一緒にいる所を何度も見ているし、そして彼等はバンバング郊外のサン・フェルナンド・バリオ地区を拠点にしていた、ベンの家族もその近辺に住んでいたはずだ。そうしてギガはバスに飛び乗りコルゲートから出発していた。一九六九年一月早朝、ギガはデュラオのベンの家をノックした。ベン・バルモアは彼が誰なのかまったく思い出せなかった。ギガはベンに、戦時中ゴールド・リリーの色々な施設で話をしたじゃないかと、言った。そして自分は財宝の目録作りにも関与していたと話をした。しかし、目録作りは竹田宮だけが関わったことをベンは知っていたので、それは真実ではないとわかった。そしてギガに会ったことがない事を確信した。ギガはいつも日本の軍服を着ていたと言っている、それではどうすれば他の兵士たちの中でギガを思い出せるだろう？

最初から二人の関係は緊迫していた。ベンはギガがひねくれ者で信用できないと感じたからだ。後日ベンは、ギガが誰に対しても、自分は皇子の従者で、財宝の地図を（ベンではなくて）自分がもらったと話しているのを知った。ギガは戦争の後、地図の入ったカバンは燃やしてしまい、今はコピーがあるだけだと言っていた。ギガは一ヶ月千ドルの手付金でどこを掘ればいいのか教えたのだろう。我々の調査員が一九八六年、彼を問い詰めると、ベンは前年に死んでいて、彼と自分とともに日本人とフィリピン人

の混血だと主張した。これはどちらも嘘だ。それから彼は終戦の週にベんと共にいかにしてバグイオで山下將軍から地図を盗んだのかを詳しく語った。

ギガはデュラオに数週間滞在し、何とかベンを説き伏せようとした。ベンは受け流すため、イロカノ語でしか話せないと偽った。ギガはベンが初歩的な日本語は習っていたのを知っているので日本語で切り替えした。マルコスの使者として来たのであり、慢性的なフィリピンの貧困を救うために金の回収が必要で、そのためにマルコスはベンの地図を望んでいるとベんに語った。

ベンは、マルコスは悪魔だという噂や、新聞でイメルダの数百万ドルに及ぶ買物の馬鹿騒ぎを知っていたので、信じることはできなかった。するとギガは豹変し、もしもベンが地図を差し出さないのならば、大統領国家安全令で兵士がやってきて、ベンも家族もビリバッド刑務所へ連行され、逮捕されて娘はレイプそして全員が殺されると脅した。それでもベンは拒絶した。彼は家族のことが心配だったが、キムスへの誓いがあったのだ。キムスが日本へ帰ってすでに二十三年が経過していた。ベンは三十年間、地図を守ろうと誓っていたのだ。あと七年あった。

皇子は二度とこないし接触もなかった。キムスは死んだのかと思った。そうだとするとキムスの本当の名前は誰にも言わなかった。秩父宮、三笠宮、朝香宮の名前も一度も出したことはない。それでも、ついにベンは家族を守るために歩み寄ろうと決心した。ある朝、ベンはカバンを掘り出した。まず技師の書いた青表紙（ブルーシリーズ）を取り出し、ビニールで包み、頑丈な箱に入れて大急ぎで埋めもどした。次に赤表紙を再検討した。全部で一七五種類ある。彼は三箇所気に入った施設を自分用に取り置くことにした。それは八番坑と九番坑でバンバングの近く、マニラ東方のモンタ

ルバンだ。赤表紙の地図は丈夫な紙に書かれ、仕上げの後にしっかりと蝋引きしてあった。その図面は地形を三次元で示していた。黒澤明の古い映画「七人の侍」をみた人は、村人を賊から守るために侍達が描いた同じ様な地図をみたことであろう。

図案化して描かれた物は命に関かわる情報の暗号である。日章旗が右か左へたなびくのは、その方向へ行くか否かを示している。二つかそれ以上の針を持つ時計の絵は、向かう方向の深さ、そして罫に関する情報を表す。他の記号は各施設のどこに財宝があるのかを教えている。最も重要な事は、赤表紙の地図は各施設の起点を表示していることだ。起点が分からなければ正しい深さと方向は絶対にわからない。(いくつかの赤表紙の地図はCDに公表してある)

残った一七二箇所の赤表紙の地図で、ベンは小さいと考えた所と非常に難しい所、四十箇所を選んだ。もし脅されたり家族に危険が及んだら、その束をギガからマルコスへ渡せばいいのだ。

数日後ピラクルシス大佐自身がベンの家に来て深夜にも拘わらず「ベン、ベン」と大声で叫んだ。ベンは彼を中に入れた。キムスと約束しているので応じることはできないとベンは言った。ピラクルシスは「君の気持ちは尊重するさ。」と言い、力づくで地図を取ろうとはしなかった。しかし、「大統領にだけは地図を見せなくてはならないので、私とマニラへ行ってもらいたい、その後で君に返すからね。」

言うまでもなく選択の余地はなかった。ベンはピラクルシスに四〇の小さな施設の地図を手渡した。彼は夢中でそれを見て、他のも見たいとは要求しなかった。

すっかり怯えながらベンはピラクルシスが用意した軍車両に乗せられ古い皮のケースに地図を入れ山を降りていった。マラカニアン宮殿ではなく、軍

の支配者であり、ピラクルシスと一緒に東京へ行き見玉、笹川、市原大佐と会談した軍司令官、オノフリオ・ラモスの自宅へ行った。厳重な基地司令部の将軍事務所にはタバコ臭いデブデブの悪漢達が待ち構えていた。マルコスの閣僚も含まれている。

ラモスは主人面をして飲み物を回し語った。彼らは非常に機嫌がよかった。次なる問題は、マルコスに合わせるためにすぐにもベンをマラカニアンへ連れていくかどうかだった。

ラモスは怒鳴った。「もし俺があんたならベンを渡すようなことはしないぜ。鍵をもつたんだ。鍵を持った以上、なんで大統領にベンを渡さなきゃならんのだ？」

結論はでないし、それを認めるのもならないしで、彼らは車に乗り込みマニラ東部にあるアンティポロの高台の防衛大臣、アーネスト・マタの隠れ家へ車を走らせた。マタはカバンを取り上げ、豚のように中の臭いをかぎまわった。マタはマルコス政権のごろつきの一で、彼の手により多くの血が流され、それを彼はひどく楽しんでた。

彼がいくつかの地図を調べたところで何も理解できなかった。そしてベンに尋ねた。「お前はこれを持っていた奴を殺したのか?」「とんでもない閣下、僕はこのために人を殺すなんてありえません。」「それならどうしてこんな書類を持っているのだ。」「彼が僕に残していったんです。」「いや、お前はそいつを殺している。」「ベンはとても怯えた。そしてピラクルシスに帰りたいとささやいた。ベンは約束どおり地図を返してほしいと求めたが、マルコス大統領に見せなければならぬと言われた。ピラクルシスは、マルコスがそれを見たらベンに返すだろうと言った。マタはマラカニアン宮殿の交換機に直通回線を持っていた。安全な宮殿の交換機を使って、東京の市原公に長距離電話をかけた。東京湾東部の農園にいる竹田皇子への取

次ぎを求めた。マルコス一味が聞いている中でベンに電話が渡された。次に起こったことは遠い過去のあのキムスの声だった。「やあ。ベンハミーン。」二人の会話は短いものだったが情感にあふれていた。ベンが我々に言ったのだが、キムスが簡単な日本語で話し始めたとき、声から察するに感情がこみあがったのか、泣いていたみたいだったが、話はできたという、地図を皇族以外の誰にも渡してはいけないという誓いをキムスは念をおし、呪文をくりかえした。「ベン・ハミーン、いいかいフィリピン人もアメリカ人も日本人も中国人もだめだよ。私だけを待っていなさい。」

国防大臣マタは不意に電話を取り上げ電話を切った。それがベンとキムスの最後だった。彼らは大喜びでタバコを吹かしながらお祝いをした。ベンには本物だと証明された。マルコスの所へは連れて行かない事にした。彼らが鍵を握ったのだ。

この方針の決定後、ビラクルシス、マタ達は「赤表紙の地図」を一枚もマルコスにみせなかった。マタの隠れ家を後にするときビラクルシスは四〇枚の地図の束を研究用として持って行き、ベンには空のカバンを渡した。そしてベンに幾らかの交通費を渡した。それがビラクルシスが見せた唯一の心くばりだった。

彼は他の者ほど冷酷ではなかった。そして四〇枚の地図で十分満足だった。四〇枚が理解できないのなら、もっと欲しくなるポイントとはなんだ？ベンは家族の事を心配しているから、残りの地図を取り上げるとはいつだってできるではないか。

生きている事に感謝し、ベンはバンバングへ飛んで帰った。この気の利かない、馬鹿で、威張り散らしたやり方で、一九七〇年代から八〇年代初めにかけてマルコスの金発掘が始まった。最初、本物のゴールドデン・リリーの地図があるのだから、誰が考えてもマルコスも大尉も実に簡単なことだ

と思っていた。しかし、全員が誤りだった。

ビラクルシスはいきなりサンク・メサ・ロータング施設の発掘で大成功し、アジアの国々からの金のバーの詰め合わせ、寺や仏塔から略奪した多くの金の仏像を手に入れた。大いにはりきったマルコス大統領は軍技術者の特別部隊を投入しラグーナの施設で穴掘りをさせた。

そしてそこでは金のバーがいっぱい詰まったコンクリート製の地下貯蔵庫を発掘した。(十五章参照)

マルコスが大統領として初めて本当に大きな発掘をしたのはアグイナルド野営地、旗竿の下のゴールドデン・リリー貯蔵庫だった。

次に兵士をボナファシオ要塞へ送った。(以前はマツキンレイ要塞と呼ばれていた)そこで彼らはマツカーサーの防空壕を掘り進んでいた。彼らはマニラの地下に掘られた三五マイルの長いトンネルの終点のひとつを発見した。トンネルの探索は二年間続けられたが、置き去りにされた軍車両の跡で金のバーひとつを見つけただけだった。

ゴールドデン・リリーで隠匿された地下坑と財宝はそれほど上手に隠されていたのだ。

市原公爵は協力し続けていた。マルコスが応援するギル・ガディ博士はサンティアゴ要塞で行われた穴掘りの失敗に立会い、市原公爵に専門家の助言をすすめた。准将軍がマルコスに渡したサンティアゴ・バランガン報告書には、「ガディ博士は、サンティアゴ要塞施設で直面した困難さの理由を話し、東京の市原へ手紙を書いた。市原はラグーナからペドロ・リムに連絡するように言った。リムはルソン島で略奪物資の隠匿でヤグラ大佐や山口大尉と働いていた市原部隊の一員だ。ペドロ・リムはガディ博士にベンジャミン・イルクイアのことを告げた。彼はフィリピンの電気技術者で市原公爵の依頼でサンティアゴの危険な罫を設計し施工したのだ。

すべての金貯蔵庫の場所を知っているベンにとってデュラオとバンバングでの生活とは、稲を植えて刈り取るという年間予定をこなしていくことだった。たったひとつの例外はベンがロジャー・ロクサスと友達になったことだ。彼はバグイオに住む錠前師で、埋もれている略奪品目当てに定期的にバンバングへやってきた。数年が過ぎロクサスとベンは友達になった。ある日ベンは、バグイオ病院の裏手で坑道がたくさんある地域の地図を進呈することを約束した。ロクサスは金の仏像を見つけた時、フランスの有名なレイムス大大聖堂を模った立派な金の模型もみつけた。そしてそれを発掘の分け前としてベンに与えた。その大聖堂はウエディングケーキの様に五〇センチの高さがあり、中世の教会の細かい部分を再現し、美しく手作りされたものだった。入り口の大きく丸いステンドグラス以外は純金で作られ、上品な時計がついていた。ベトナムから来た物だという以外その由来は誰にもわからない。財宝にはそれぞれ秘密の歴史があるものだ。熟練の細工師がハノイやサイゴンにあるカソリック教会の裕福な後援者の為に作ったことは明らかだ。ニューヨークやロンドンのオークションに芸術的作品として出品されたならば、その価値は金の価格の倍になるであろう。ベンはロクサスと金の仏像に起きた事を知り、彼はそれを箱に入れデュラオの裏庭へ埋めなおした。

後日、ギガからベンが金の大大聖堂を発掘したと聞いたフェビアン・バー將軍はすぐに暗殺団を差し向け、ベンにそれを渡さないならば家族を痛めつけるぞと脅した。ベンは素直に応じた。

十年後、キムスから貰ったものでベンに残っていたのは、階級章、水牛、飛行機の模型、ワラ帽子、ココナツの木、そして水田だけだった。あとはすべて盗まれるか没収されて失くした。マルコスとその悪友達がくれたものといえば、「タバコ」だけだった。

子供が生まれ宝探しが行ったりきたりした。ベンは貧乏のままだった。

一九七二年、ベンは日本人の団がバンバングにやってきて、サンフェルナンドにあったキムスのキャンプから半マイル以上離れた山下將軍の野営地でブルドーザーと掘削機を使って作業していると聞いた。ベンは馬鹿なところを掘るもんだと笑った。彼は誤解していた。ベンがキムスと地下の複合設備をめぐっている時、ベンが一度しか通ったことのない八番坑の入り口を貫通し掘り下げていたのだ。彼は離れたところに別の九番坑の入り口があることを知らなかった。

一九四五年、連結坑は潰れてしまったが、鉄筋コンクリートで強化された主坑道はそのままだった。これらの日本人が開けた九番坑の入り口は山下の防空指令本部へ通じていた。

日中、彼らは地下の見えないところにいた。近隣の農民の話では、夜になると空のトラックがやってきて夜明けには満載で去って行ったという。マルコスを利用してゴールデン・リリー施設の回収を進めるため、竹田皇子はバンバングの地下複合施設の部分的な回収を許可したのだろう。

それは八番坑や共同墓地につながる連結坑の再開通に関わっていただろうから、すべてを回収するのは不可能になってしまふ。(訳注、申し訳ない、ちよつとここのところ意味がわからない。)

竹田が二年後の一九七四年に私用でマニラに戻った事を我々は知っている。当時、九番坑の回収は完了していた。一九四五年六月、ベンと別れ、潜水艦で日本に戻って以来、彼は任務を完璧に成功させたおかげで、裕仁から温かく受け入れられていた。終戦の月には満州に送られ、帝国陸軍の財務長官に着任していた。終戦時、彼は満州の関東軍が裕仁の降伏命令に従う

事を確実にするよう指令をうけていた。

その後、竹田宮は妻と子供を連れて東京へもどった。

貴族制度が終わり、竹田は爵位を奪われ単に竹田恒徳になった。これは明治天皇の意志で一九〇六年に設けられた日本の偉大なる宮家のひとつ、竹田宮家の終わりをもたらした。他の旧宮家と同じで、連合軍に財産を没収されるのを避けるため、竹田は自分の邸宅を富豪の堤家に売却した。堤と彼は残りの人生において密接に関わっていくことになる。彼は東京湾の東部、千葉県ののんびりした農場ひとつだけを残した。他の皇子と同じく実業家として竹田編物機械会社を始めたが、すぐに倒産した。アメリカ人が帰還すると、竹田はすぐに日本の最上貴族としての生活をとりもどした。金などは問題ない。すべてが過去のものとなり、彼はすべての日本人支配者を裕福にする手伝い、つまり借金を返さなくてもよくなるような努力をした。

醜い東京にはあきあきし、ほとんどを千葉で過ごし、世界でも最も高価な趣味のひとつであるサラブレッドの品評会をたちあげた。

一九六二年日本オリンピック委員長になり、一九六七年〜八一年までIOC（国際オリンピック委員会）のメンバーだった。（彼の息子もこのIOCを引き継いでいる。）

一九六四年四月のジャパントゥライムズで竹田の横顔が次のように書かれてある。「もし、一言で竹田を表現するとしたら「なげやかた」（relaxed）だ。自意識や緊張というものから完全に解放され、優しく暖かい雰囲気、惜しみなく好意を示してくれる。毎日の活動において、「真実、公正、善意にこだわろう」と書かれた机の文字は、彼が生きてきた信条を表している。もしもあなたが王様の気品をお望みならば、その最良の見本をお見せできるであろう。」

一九七四年、日本兵の生存者小野田寛郎少尉がマニラ湾の七〇マイル西南、七四マイル四方のルパン島で隠れているところが発見され、竹田はフィリピンへ飛んでいった。

一九四五年当時、三人を除いたルパン島の日本兵はアメリカ兵との四日間にも及ぶ戦闘で殺されるか捕虜になった。小野田と二人の戦闘員はジャングルにもぐりこみ三十年にわたって散発的なゲリラ戦を継続していた。

一九五〇年代、戦争は終わったのだと語りかけるピラをばら撒いたが、彼らは偽装であると考えた。結局、小野田の仲間二人とも熱帯性の病気で死に、日本では小野田自身も法律的には死んだことになっていた。ルパン島の村人はそうは思っていない。

一九七四年二月、日本人の若者、鈴木紀夫が小野田をジャングルでみつけた。彼はライフルと五百発の弾薬、手榴弾を持っていた。小野田は自分で指令を出した将校の指令解除がなくては投降できないと拒否した。ベンはテレビのニュースですべてを知った。彼は戦時中、竹田皇子とともに財宝金庫の隠匿にルパン島で数週間すごした。その時、ベンは小野田に会っていた。その施設を守るよう小野田に命じたのは竹田宮であることをベンは知っていた。だから竹田宮だけが指令を解除できるのだ。数週間後、数人の日本人役人が小野田に投降を説得するためフィリピンへ到着した。

注目は谷口義美少将に集まり、テレビでは小野田の司令官だったと紹介された。しかし、代表者の後ろにベンは忘れられない顔、竹田宮を確認した。彼が密かに小野田を任務から解放しにやってきたのだ。数日後、小野田は日本に帰還した。（彼は近代的になった日本にはなじめないと主張し、ブラジルのマタ・グロツソにある大きな日本人所有の農園に送られた。ルパン島の財宝が回収されるまで、誰も彼を訪ねて来れないように多くの護衛がつけられた。ルパン島での回収は裕福な日本人旅行者のためのリゾート

開発を装い、笹川が成し遂げた。それはマルコスの要望でやった事だと、笹川は言った。結局、ホテルやゴルフクラブが建てられ、日本人の金持ちハンターのために、アフリカの未開の遊びや珍しい鳥が集められ、性的な遊びのために若い男女が用意されていた。

同時にイメルダの福祉事業に多くの寄付をしてもらい、戦時中の不快感を日本とフィリピンの友好関係を確立することで払拭するため笹川をフィリピンの名誉市民にした。

笹川はマルコスに戦時略奪の分け前を渡すとは言わなかった。

竹田宮は戦後ベンに会いにくることはなかったが、使者をよこした。一九八四年、そのころベンは一時的にマニラに住んでいた。ある朝、日本人の相撲取りのような男がバンバングでバスを降り、重いスーツケースを下ろした。戦時中、竹田宮に従っていた将校の笠淵大佐だった。いまや年をとり白髪の彼は暑さで参り、湿ったハンカチで顔の汗をぬぐった。バンバングにタクシーはなくオート三輪しかなかった。唯一のオート三輪乗り場はランゴの所有で、彼は人に乗せたり物を運ぶことを仕事にしていた。笠淵はランゴにサン・フェルナンド部落へ連れていくように頼んだ。ランゴはスーツケースを持つとしたが笠淵は断った。サン・フェルナンドへ着くまで膝の上に抱えていた。ランゴにベンハーミンという名の男を捜していると言った。笠淵はベンの名字を知らないし、もともと、どの部落からやってきたのかも覚えていなかった。彼はランゴに、ベンは、ここサンフェルナンドで日本人皇族の従者をしていたと語った。笠淵は、はるばる東京から皇子のプレゼントをベンに持ってきたのだった。ランゴが何度もスーツケースを運ぶと申し出たが大佐は触らせようとはしなかった。一日中、三輪自動車で走り回りベンを知る者を探した。もしも彼らがあと一キロいやその半分でもデユラオ部落へ近づいていたなら、誰でもベ

ンを知っていたらどうし、どこへ行けばベンに会えるのかを大佐に正確に話してきたらどう。最終日になり、彼とランゴはやれる事はすべてやっと認め、笠淵は渋々マニラへの最終便に乗り、贈り物のスーツケースは彼が持ち帰った。

ベンはやはり貧乏のままだった。